

美作の狛犬（3）

田淵千香子

はじめに

前回の調査では、美作地域のうち真庭市・新庄村近辺の狛犬を調査した。そして、半数以上を占める出雲型狛犬について触れ、そのルーツを追った。小稿では、美作地域の神社 279 社中 172 対の狛犬を調べ、出雲型狛犬の展開についてまとめる。さらに、美作地域の各所で確認できる津山城の石垣と同質の凝灰岩で造られた石造物についての中間報告をする。

美作地域の出雲型狛犬

美作地域の狛犬の調査を進める中で、同じ地域内でも奉納する狛犬の種類等に違った傾向がみられることが分かった。例えば、津山市内には、狛犬が 68 対所在している。その内出雲型狛犬は、18 対である。さ

らに、来待石製の出雲型狛犬になると 18 対中 7 対がそれにあたる。この 7 対の中では、津山市宮脇町の徳守神社の本殿前のものが明治 40 年（1907）と最古である。これ以外の狛犬は全て昭和時代に入ってからのものである。そのため、江戸時代には、来待石製の出雲型狛犬が市内には入ってきていないことが分かる。しかし、津山市から鏡野町を抜け真庭市、新庄村へ向かうと少し違った趣をみせる。ここで見られる狛犬は、86 対中 48 対が出雲型狛犬であり、全体の半数以上を占めている。また、石材別で分類すると来待石製の 25 対、地元の石材等で造られたものが 23 対である。この内、江戸時代に奉納されたものが 13 対あり、真庭市勝山の玉雲宮出雲大権現は文政 6 年（1823）・真庭市中和の山王大権現社は天保 11 年（1841）・真庭市



写真 1 玉雲宮出雲大権現
(真庭市勝山)
文政 6 年 (1823)

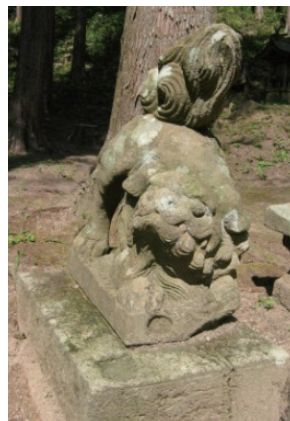


写真 2 山王大権現社
(真庭市中和吉田)
天保 11 年 (1841)



写真 3 福田神社
(真庭市中福田)
文久元年 (1861)

江戸時代の来待石製出雲型狛犬



写真 4 八幡神社
(真庭市美甘)
文化 7 年 (1811)



写真 5 長田神社
(真庭市下長田)
嘉永 4 年 (1851)



写真 6 国司神社
(真庭市中和)
嘉永 4 年 (1851)

江戸時代に来待石以外の石材で造られた狛犬

中福田の福田神社は文久元年（1861）の3件が、来待石製の出雲型狛犬である（写真1～3）。このことから、美作地域の内でも真庭市、新庄村近辺には、江戸時代に来待石製の出雲型狛犬が入ってきていることが分かる（図.1-1）。

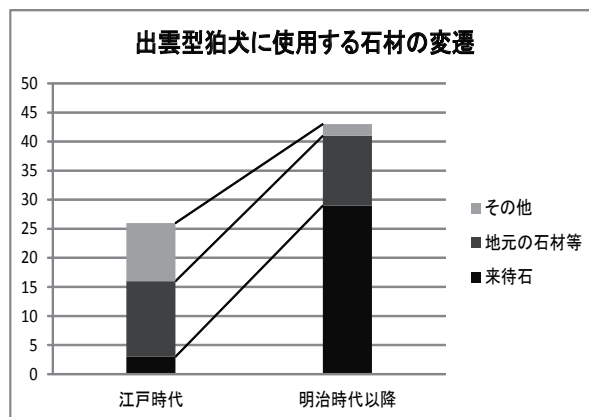
また、江戸時代に奉納されている出雲型狛犬の中には、地元の石材等で造られたものが美作地域の各所でみられる。その中では、真庭市美甘の八幡神社の狛犬が文化7年（1811）と美作地域の出雲型狛犬の中では最古のものである（写真4～6）。このように、江戸時代には、美作地域でも、より出雲国に近い地域で多くの出雲型狛犬が確認できる。

明治時代以降の来待石製出雲型狛犬

江戸時代には、真庭市や新庄村近辺でしか確認できなかった来待石製の出雲型狛犬が、明治時代になると美作地域の各所で確認できるようになる（図.1-2）。このことは、来待石製と地元の石材等で造られた狛犬を時代で分けてグラフにしたものをみても分かる（グラフ.1）。これを見ると、江戸時代と明治時代以降では、後者の方が来待石製の出雲型狛犬が顕著に増えていることが分かる。これは、江戸時代までの来待石が御止石として藩の許可なしには販売することができなかったことに由来すると考えられる。明治時代に入り、来待石の流通が自由になると、全国的にも来待石製の出雲型狛犬が見られるようになり、美作地域へも例外なく入ってきていることが分かる。明治時代以降、最も早く来待石製の出雲型狛犬を奉納しているのは、新庄村の御鴨神社に所在する明治29年（1896）のもので

ある。続いて、真庭市見明戸の護国神社は明治30年（1897）・真庭市美甘の美甘神社は明治31年（1898）・真庭市関の大宮神社は明治35年（1902）・鏡野町中谷の中谷神社は明治36年（1903）・津山市宮脇町の徳守神社は明治40年（1907）に各々奉納されている（写真7～9）。これら以降になると、愛知県の岡崎型狛犬などが入る中でも、真庭市近辺で23件、津山市内は6件、その他の美作地域でも数件の来待石製の出雲型狛犬が確認されている（図.1-2・図.1-3）。

さて、美作地域の石工の中に来待石製の出雲型狛犬を造る人物が出てくる。『石工 田渕良次郎』である。津山市上田邑の田神社の昭和8年（1933）に造られた狛犬を初め、市内はもちろん、美作市江見の江見神社の昭和10年（1935）の狛犬も製作している。田渕良次郎は、鳥取へ出雲型狛犬を造る為の修業に行ったことが分かっており、美作地域の来待石製出雲型狛犬の普及に一躍を担ったものと思われる。また、新見市千屋の千屋神社の狛犬は、大正4年（1915）に奉納



グラフ 1



写真7 美甘神社
（真庭市美甘）
明治31年（1898）



写真8 中谷神社
（鏡野町中谷）
明治26年（1893）



写真9 徳守神社
（津山市宮脇町）
明治40年（1907）

明治以降の来待石製出雲型狛犬



写真 10 御鴨神社
(新庄村)
慶應 2 年 (1866)



同台座銘



写真 11 松山神社
(鏡野町)
明治 5 年 (1872)



同台座銘

『石工 伯州倉吉住 文四郎』制作の石造物

された来待石製の出雲型狛犬である。台座には「伯耆国 福嶋豊」と書かれ、津山市の石工が鳥取へ修業に行っていたことを合わせて鑑みると、江戸時代には松江の城下でしか製造を許されなかった来待石製の出雲型狛犬が、明治時代に入り来待石の販売が自由化されたことによって、受注が増えた。こうした変化の中、近隣の鳥取に製造工場が出来たものと考えられる。しかし、美作地域では、来待石製の出雲型狛犬が戦後を境にあまり見られなくなる。最後に確認できるものは、真庭市平松の平松神社の狛犬であり、昭和 39 年 (1964) に奉納されている。

伯州の狛犬と石工

美作地域で見られる狛犬や石造物の中には、伯州の石工が幾人か確認できる。特に、来待石製出雲型狛犬を模して造られた狛犬の中に、伯州由来のものが見られる。新庄村の御鴨神社の狛犬は、慶應 2 年 (1866)・鏡野町松山の松山神社の狛犬は、明治 5 年 (1872) に造られ、その台座には『石工 伯州倉吉住 文四郎』と書かれている (写真 10・11)。この他にも狛犬ではないが、中蒜山の日留神社にある石の宮は、明治 2 年 (1869) に文四郎が造ったものと確認されている。文四郎の作品をみると、全体に出雲型をベースにしつつ、細やかな表現が成され、バランスもとれた丁寧な仕上がりである。しかし、『石工 文四郎』については、鳥取県の倉吉に住んでいて、美作地域への仕事も受けていたということが分かっているだけである。さらに、鳥取県内では文四郎の石造物は確認されておらず、史料も存在していないため、その足跡を追うことは困難である。今後の調査で、なんらかの足掛かりが見つ

れば幸いである。このように、美作地域では伯州の石工銘の入った石造物は少ないが数点見られる。来待石製の出雲型狛犬が珍しかった江戸時代、近隣の鳥取でそれに倣った狛犬が造られ、美作地域にも運ばれていたことが分かった。

津山城の石垣と美作国の石造物

美作地域を調査すると、狛犬・御神燈・鳥居・石柱など、津山城の石垣に使われている石材と同質と思われる凝灰岩製の石造物が多く確認できる。この凝灰岩製の石造物について考察する。

津山城の石垣は、主に津山市大谷の石山寺周辺の石切場や、金屋山の石切場で採石されていた (写真 13・14)。しかし、この石は学名を「凝灰角礫水成岩」といい、石垣や石段などには向いているが水分を含むともろくなり、狛犬や御神燈、鳥居などには向いていないことが分かった。そのため、大谷の石切場では明治時代以降になると採石されなくなったようである。ま



写真 13 津山城石垣



写真 14 石山寺 石切場跡
(津山市大谷)

津山城の石垣と石切り場跡



写真 15 高野神社
(津山市高野本郷)
天保 15 年(1844)



写真 16 美作総社宮
(津山市総社)
嘉永 6 年(1854)

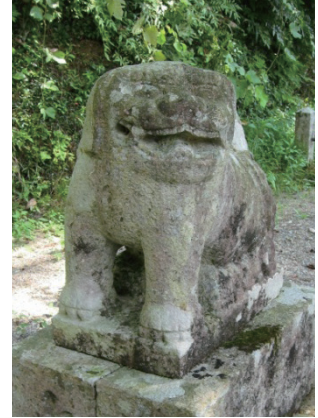


写真 17 大美彌神社
(鏡野町香々美)
弘化 3 年(1847)

美作国内の凝灰岩で造られた狛犬

た、津山城築城に際しては多くの石材を要したため、上記に挙げた場所以外にも美作国内の各所で採石が行われた。それでも需要が賄されなかった為、美作国内の古城の石材や古墳の石槨・石棺、墓石までが掘出されたという伝説もある。

今現在の調査では、美作地域内に 83 件の凝灰岩製の石造物が確認されている。その内、年代が確認できるものが 61 件あり、江戸時代は 27 件、明治時代は 23 件、大正・昭和時代は 9 件となっている。江戸時代でも、寛政期から嘉永期にかけての奉納数が多いことなどは、花崗岩やその他の石材で造られた石造物と同じ傾向を示している。確認がとれている範囲内で一番古いものは、美作地域でも東部にある美作市豊国原の豊国神社の御神燈で、文政 2 年(1819)に奉納されている(写真 19)。また、津山市上田邑にある田神社の御神燈が、天保 3 年(1832)年に奉納されている(写真 20)。美作地域の南部に行くと、美咲町飯岡の飯岡神社の御神燈が、弘化 2 年(1846)に奉納されている。このように、

津山市内はもちろん、鏡野町・美咲町・美作市などにも江戸時代の凝灰岩製の石造物が確認できる(図 2-1)。さらに、調査が進めば分布範囲は東へ南へと広がるものと考えられる。特に鏡野町には、確認できている範囲だけでも 19 件中 15 件の凝灰岩製の石造物があり、その内の 6 件が江戸時代のものである。

江戸時代の石造物の中には、凝灰岩製の狛犬も所在している(写真 15・16)。鏡野町香々美の大美彌神社の狛犬は、弘化 3 年(1847)に奉納されている。ふっくらとしたあんこ型で、津山市内のもと同様にユーモラスな容姿をしている(写真 17)。さらに鏡野町の調査によれば、宝篋印塔・五輪塔・六面幢などに凝灰岩製のものがあることが分かっている。

しかし、美作地域内であっても真庭市・新庄村周辺では、凝灰岩製の石造物を確認することができなかった。

明治時代に入り、石山寺の石切場での採石は終了する。しかし、分布図をみると、美作地域の各所で明治時代以降も凝灰岩製の石造物が確認できる(図



写真 18 豊国神社
(美作市豊国原)
文政 2 年(1819)



写真 19 田神社
(津山市上田邑)
天保 3 年(1832)



写真 20 白加美神社
(津山市小田中)
明治 8 年(1875)



写真 21 七森神社
(津山市坪井)
昭和 15 年(1940)

江戸時代に凝灰岩で造られた御神燈

明治時代に凝灰岩で造られた御神燈

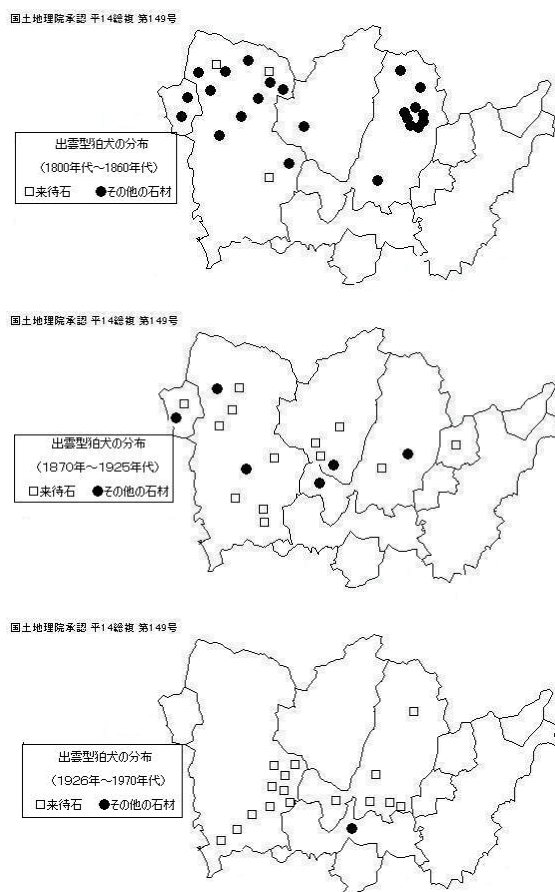


図1 美作地域の出雲型狛犬の分布図

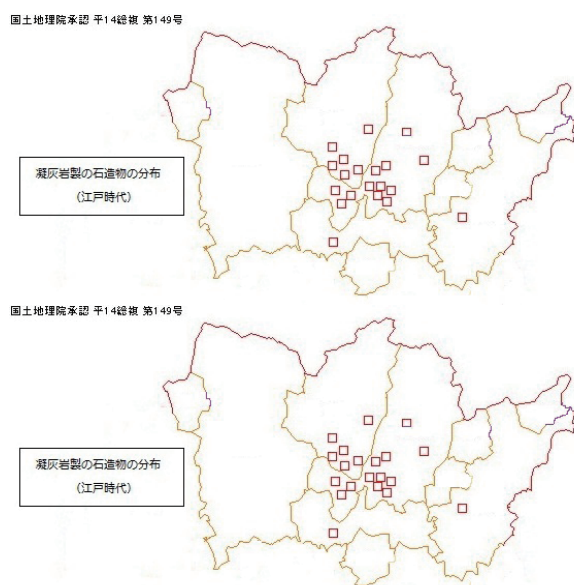


図2 凝灰岩製の石造物の分布図

2.2)。津山市井ノ口の石切場では戦後まで、津山市種周辺の石切場では昭和の中頃まで採石されていたことが分かっている。今後の調査では、このあたりに留意して年代ごとにみられる石材やデザインなどの特徴が分かればと考えている（写真20・21）。

まとめ

小稿では、美作地域に所在する出雲型狛犬についての調査結果をまとめた。その結果、美作地域内に出雲型狛犬が真庭市、新庄村近辺で多く確認でき、狛犬の半数以上が出雲型であることが分かった。こうした中でも、江戸時代の来待石製の出雲型狛犬は珍しく、数件しか所在していない。他のものは、地元の石材等で出雲型を模して造られたものが殆どであることが分かった。明治時代に入ると、全国的に来待石製の出雲型狛犬が増える。それは、来待石の自由化が成された為であると考えられる。美作地域でも、江戸時代は数件しか入ってこなかった来待石製の出雲型狛犬が、明治時代以降には明らかに増えていることがわかり、昭和の半ば頃まで確認することができる。前号に引き続き、出雲型狛犬について考察してきたが、以上でまとめとしたい。

また、美作地域に分布している津山城の石垣と同質の凝灰岩製の石造物についても言及した。津山城の石垣に使われている凝灰岩は、美作国の各所で採石されたもので、美作地域に分布している石造物も同じ場所から採石された可能性があることが分かった。ただし、採石場によっては採石されていた時代が限られているので、年代による分布についても気を付けてみていかなければならない。今回の調査では、まだ美作地域全域の悉皆調査が全て終わっておらず、何らかの傾向を示すことはできないため、中間報告とした。

小稿を記すにあたって、倉敷埋蔵文化財センターの藤原好二氏には多くの御助言をいただいた。来待ストーンミュージアムの永井泰氏、田渕石材、和田石材、石山寺の関係者の方にはご教示いただいた。現地調査や聞き取り調査では、様々な人にお世話になった。末筆ながら記して御礼申し上げます。

田渕千香子『年報 津山弥生の里 第17号』津山市教育委員会 2010年

来待ストーンミュージアムの永井泰氏の御教示による。

田渕石材の田渕清巳氏の御教示による。

石山寺関係者の方の御教示による。

津山市教育委員会『津山市史第3巻』1973年

苦田ダム水没地域民俗調査委員会『奥津町の石仏』2004年

石山寺関係者の方の御教示による。

viii津山市教育委員会『津山市の文化財』2010年

ix鏡野町教育委員会『鏡野町の石造物』2003年

x作東町教育委員会『作東の石造物』2006年

x I 田渕千香子『年報 津山弥生の里 第18号』津山市教育委員会 2011年

番号	神社名	所在地	寄進年	石工銘	体調 (cm)	姿勢	材質	型	保存状態
1	玉雲宮出雲大権現	真庭市勝山	文政 6 年 (1823)	不明	120cm	座	来待石	出雲型	良し
2	山王大権現社	真庭市中和	天保 11 年 (1841)	不明	57cm	構	来待石	出雲型	少し心配
3	福田神社	真庭市福田	文久元年 (1861)	不明	111cm	座	来待石	出雲型	良し
4	八幡神社	真庭市美甘	文化 7 年 (1811)	不明	46cm	座	その他の石材	出雲型	良し
5	長田神社	真庭市上長田	嘉永 4 年 (1851)	伯州久米郡堀村石工亀助・頼治	86cm	座	その他の石材	出雲型	良い
6	国司神社	真庭市中和	嘉永 4 年 (1851)	不明	59cm	座	その他の石材	出雲型	良し
7	美甘神社	真庭市美甘	明治 31 年 (1898)	不明	91cm	構	来待石	出雲型	良し
8	中谷神社	鏡野町中谷	明治 36 年 (1903)	不明	84cm	構	来待石	出雲型	良し
9	徳守神社	津山市宮脇町	明治 40 年 (1907)	不明	79cm	座	来待石	出雲型	良し
10	御鴨神社	新庄村	明治 29 年 (1896)	伯州倉吉文四郎	94cm	座	その他の石材	出雲型	良し
11	桧山神社	鏡野町高山	明治 5 年 (1872)	伯州倉吉文四郎	80cm	座	その他の石材	出雲型	良し
12	高野神社	津山市高野本郷	天保 15 年 (1845)	桶屋町安田○斎吉金兵衛亥	54cm	座	凝灰岩	大阪の狛犬	良し
13	美作総社宮	津山市総社	嘉永 6 年 (1853)	不明	91cm	座	凝灰岩	大阪の狛犬	良し
14	大美彌神社	鏡野町香々美	弘化 3 年 (1847)	不明	57cm	座	凝灰岩	大阪の狛犬	良し
15	豊国神社	美作市豊国原	文政 2 年 (1819)	不明					良し
16	田神社	津山市上田邑	天保 3 年 (1832)	不明					良し
17	白加美神社	津山市小田中	明治 8 年 (1875)	不明					良し
18	七森神社	津山市坪井	昭和 15 (1940)	不明					良し